

日本語における自称表現

セペフリバディ アザム

●要旨

日本語の一人称を表す自称表現はその種類が多く、さらに男性の「自分」、女性の「うち」なども近年かなり普及していると考えられている。しかし、話し手の性差や年代差によって、その使用がどのように偏っているかという実態調査はこれまで部分的にしか行われてこなかった。本研究では、東京在住の小・中・高・大学生、社会人男女25名ずつを対象に、家庭内でどのような自称表現を用いているか、質問紙調査の結果わかった自称詞の使用実態を、次の4点を中心に報告する。①男性と女性とでは明らかにその使用が異なること。②年代が進むにつれて自称表現が変化し、社会化されること。③「自分」や「うち」といった近年指摘されている形式が定着していること。④「こっち」「こちら」という自称詞が小学生の男子を中心に新たに見られるようになったこと。

●キーワード

親族呼称、人称代名詞、社会言語学、年代差、性差

●ABSTRACT

Japanese language has a variety of first person pronouns. Moreover, it is believed that the two pronouns of *jibun* and *uchi* are becoming increasingly used by men and women respectively. However, no comprehensive fact finding research has been carried out to determine how the application of these pronouns might be affected with respect to the age and gender of the speakers addressing themselves in different contexts. The present study has been newly carried out to determine how people refer to themselves at home. The subjects were the students at different academic levels (i.e., elementary, junior and senior, university) as well as workers in Tokyo. Two groups of male and female were selected from each level, resulting in eight groups in total each including 25 members.

This report presents the survey result with the following four facts as the focus of the study: 1) The first person pronouns are used quite differently by males and females. 2) The older the speakers are, the more appropriately they refer to themselves using pronouns. 3) *jibun* and *uchi* (i.e., the words to draw people's attention) are now generally used. 4) Elementary school boys are mainly using *kocchi* or *kochira* to address themselves.

●KEY WORDS

kinship terminology, personal pronoun, sociolinguistics, difference in generation, difference in sex

Japanese Expressions to Call Oneself

SEPEHRIBADY AZAM

1 はじめに

人と人のコミュニケーションは人称表現から始まると言っても過言ではない。人称表現は、話し手と聞き手の関係を築くために非常に重要なツールである。人称表現には言語によって特有の形式があり、場面や人間関係によって様々な使い分けがある。

本研究は、現代日本語の会話を通して、日本語母語話者の言語行動と、その背後に存在する目に見えない社会的な構造を解明することを目的としている。日本語の自称詞の多様性はしばしば指摘されるが、その背景には、話し手の性差、発達段階が、時代と社会の変容の中で、それぞれ影響を及ぼしていると考えられる。特に親族間で用いられる日本語の自称表現や自称詞について、その会話における使用実態に焦点をあてて分析する。そのためには、文法的な知識に基づき考察するのみでは不十分であり、話し手と聞き手の人間関係、心理的プロセスについても考慮する必要がある。そこで、筆者は先行研究を踏まえた上で、多様に変容し続ける親族間の自称詞の実態を探るため、独自に調査を行った。

その結果、男性・女性とも、発達段階に応じて異なる自称詞が用いられること、成長に伴う自称詞の変化は男性が先行するが、社会人にふさわしい自称詞の獲得は女性のほうが早いこと、「こっち」「こちら」などといった、日本語母語話者の間でもあまり認識されていない自称詞の使用が確認できたこと、また、聞き手が同一人物であっても、状況に応じて異なる自称詞を用いることが、新たな知見として得られた。

2 自称詞に関する先行研究

日本語の自称詞の使い分けに関する主要研究の中で小林(1999)は、自称詞の使い分けについて、話し手の性差に主眼を置いて検討している。他方、吉田(1990)は学校生活の様々な場面、桜井(2002)はデザイン事務所、美容院、研究機関等、職場における自称詞を分析している。さらに、人称詞を待遇表現の

一項目と捉え、話し手と聞き手の年齢差、職階差などの社会的関係を取り上げた研究(国立国語研究所2002,2003;真田1990;杉戸・尾崎1997;本田1998)もある。

対話者の待遇性に着目して分析を行った鈴木(1973)の研究によれば、親族間で自称詞として用いられることばは、人称代名詞、名前、親族語である。鈴木は、自称詞選択の最も重要な要因として、親族内の目上の者に対しては、名前で自称することが可能で、目下の者には自分を相手の立場からみた親族語で自称することができること、つまり、話し手と対話者の親族関係や年代差、性差など、対話者の待遇性を強調している。本研究では、親族に対して用いられる自称詞について、主に鈴木の説を踏まえて、データを分析することにする。

鈴木(1983)は、自称詞(terms for self)は、話し手が自分自身に言及する全てのことばを包括する概念であると定義づけ、一人称代名詞は、そのうちのごく一部に過ぎないと強調している。図1は、鈴木による日本語の自称詞を图示したものである。

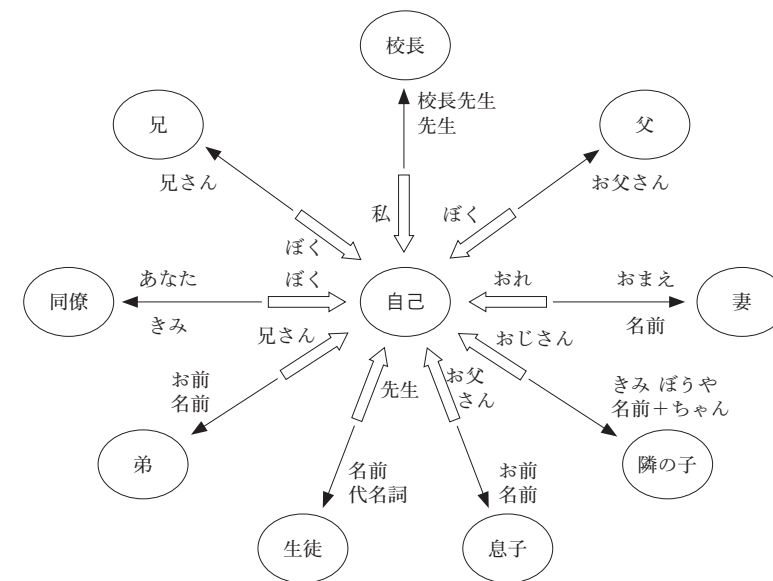


図1 上下関係(鈴木1983:148)

日本語では自称詞として「わたくし」「わたし」「ぼく」「おれ」「お兄さん」などが主に用いられている。そして、この法則性を基本的に支えているのは、目上(上位者)と目下(下位者)という対立概念である。このことは敬語構造の一般的性格などに照らして当然のことであるが、鈴木は、対人関係用語としての自称詞の使い方には、実に見事な上下関係が確認されると指摘している。また、日本語母語話者の対話は、たとえそれが社会的なコンテキストのものでも、究極的には親族間の対話パターンの拡張とみなされると考察した。

鈴木によると、日本社会では、自分より上の世代に属する対話者は全て目上であり、自分と同じ世代の対話者との間では、年齢の上下が目上か目下かを決定づける。鈴木は、親族間で用いられる自称詞のことばの構造を分析し、親族内の人間関係の上下を図示化している(図2参照)。

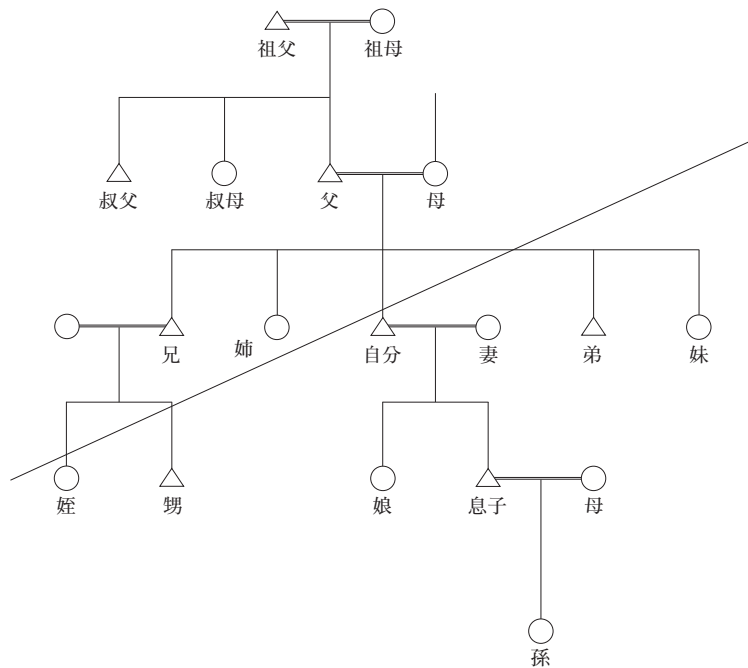


図2 親族の上下関係 (鈴木1973: 171)

鈴木は自称詞の用法の制約について、以下の法則性を挙げている。

- ①話し手が、分割線より上の者に対して自分を名前で称することは可能である。分割線より下の者に対して自分を名前で称することも可能であるが、分割線より下の者に対しては通例これを行わない。
- ②話し手は分割線の下に位置する者を相手とするときは、自分を相手の立場からみた親族名称で称することができるが、分割線より上の者に対してはそれができない。

さらに鈴木(1983)は、虚構的用法(fictive use)においては、日本語は西洋語ときわだった対照をなしていると述べている。それは呼びかけのみならず、他人に対し自分自身をも親族名称を用いて称することが可能であるという点である。このように日本語には自称詞の虚構的用法が豊富に存在する。すなわち、話し手は対話者が親族である場合、自分とどのような親族関係にあるかを考え、その関係に対応する親族名称を自称詞に選ぶのである。

日本語の人称代名詞は、西洋語に比べ、その数が多く、また同時に西洋語などとは異なり、絶対的な人称を表す要素として文の構成に不可欠であるとはいえない。むしろ、話者としての自分と対話の相手や話題にのぼる第三者の関係を表す待遇的役割を担い、お互いの関係やそれぞれの置かれた立場によって使い分ける必要がある。これは、対称詞の使用時のみならず、自称詞の使用の際においても同様である。例えば日本語の習慣では、人称代名詞を用いるよりも、親族名称や職業・役割名を用いた方が自然な場合がある。また、自称詞として人称代名詞を使用する際も、相手との上下関係に応じて代名詞が選ばなければならない。

筆者は、このように多様な日本語の自称詞がそれぞれの場面でどのように使い分けられているのか明らかにすることをねらいとして、アンケート調査を行った。同調査では、東京在住の小学生から社会人までの各世代の日本語母語話者を対象とし、家庭内での親族呼称に着目して、家庭生活において使用される自称詞について調べた。本研究では、その調査結果に基づき、世代差や性差によって自称詞の使い分けがどのように変化するかを考察したい。その際、特

に、話し手と対話者の性差、話し手の成長が自称詞に与える影響に重点を置いて分析を進める。

なお、本研究では、言語体系と言語使用の接点が考察に密接に関わる社会言語学的アプローチを採用する。すなわち本研究は、日本語における自称詞の体系と使用の相互関係を明らかにする基礎研究の1つである。

3 調査方法

3.1 アンケート調査

著者は、2010年7月から12月にかけて、日本語を母語とする東京在住の日本人250名を対象に調査票を配布してアンケート調査を実施した。アンケート調査において不明な点は、フォローアップ・インタビューによって情報を収集した。250名の内訳は、東京都内の公立小学校5年生、公立中学校2年生、公立高等学校2年生の男女各25名、同じく都内にある2大学の男女学生各25名、また都内在住の社会人2年目の男女各25名である。なお、大学生と社会人は、東京在住の小中学生・高校生に合わせて、東京都およびその近県である神奈川県・埼玉県・千葉県の出身者を対象とした。

調査対象者として、中学・高校・大学2年生の男女、社会人2年目の男女を選定したのは、2年目が一般的に学校や職場の環境になじみ、調査対象者の用いる呼称や使い分けに対する生活環境・状況等の影響が安定化する時期であると考えられるためである。また、小学生については、当初、低学年の2年生と高学年の5年生を調査対象とすることを想定していたが、2年生の場合は質問用紙に回答してもらうことが困難であったため、5年生に対してのみ調査を実施した。

表1 調査対象の性差および人数

性	小学5年	中学2年	高校2年	大学2年	社会人2年	計(名)
女性	25	25	25	25	25	125
男性	25	25	25	25	25	125
計(名)	50	50	50	50	50	250

3.2 質問項目

同調査では、家族間の関係の差異による日本語の呼称の使い分けを検討するため、話し手を基準に、同世代と異世代の「目上」と「目下」の関係にある家族を設定し、それぞれの親族に対してどのような呼称を用いているか、調査対象者に尋ねた。

できるだけ多様な呼称のバリエーションを収集して類型化し、その類型から日本語の呼称の使い分けの傾向とその特徴を探るために、回答は自由記入式で行った(図3)。なお、回答者には、それぞれの親族と対面して会話するという状況を想定し回答してもらった。

氏名() 性別(男・女) 年齢() 出身地()

I 家族に対して

- 自分の両親をどう呼んでいますか。
 - 呼びかけるとき: 父() 母()
 - 両親との会話のなかで: 父() 母()
- 両親からどう呼ばれているか。
 - 呼びかけられるとき: 父() 母()
 - 両親との会話のなかで: 父() 母()
- 祖父母をどう呼んでいますか。
 - 呼びかけるとき: おじいさん() おばあさん()
 - 祖父母との会話のなかで: おじいさん()
おばあさん()
- 祖父母からどう呼ばれていますか。

II 自分自身に対して

日常生活のなかで自分のことをどう呼んでいますか。それぞれの相手と話すときに使うものを書いてください(例: ボク、ワタシ、アタシ、オレ、ジブン、……)。あてはまる家族がない場合には何も書かなくて結構です。

- 両親と話すとき()
- 祖父母と話すとき()
- 兄、姉と話すとき()
- 弟、妹と話すとき()

図3 主な質問項目(アンケート票より抜粋、筆者作成)

4 自称詞に関する調査結果と分析

4.1 両親に対する自称詞

表2 両親に対する自称詞^[注1] (男)

人称	項目	レベル				
		小	中	高	大	社
人称系 自称詞	わたし	—	—	—	1	2
	ぼく	1	1	5	8	12
	おれ	3	5	12	7	3
	自分	1	6	1	1	2
	おいら	2	2	2	2	1
	おら	—	1	—	1	—
	わし	—	2	1	1	—
名前系 自称詞	名前	3	2	—	—	—
	あだ名	1	—	—	—	—
指示系 自称詞	こちら	5	2	—	—	—
	こっち	7	2	—	—	—
	いない	2	2	4	4	5
	合計	25	25	25	25	25

表3 両親に対する自称詞 (女)

人称	項目	レベル				
		小	中	高	大	社
人称系 自称詞	わたし	—	2	3	5	12
	あたい	—	2	1	—	—
	あたし	1	2	5	8	2
	うち	4	5	8	3	3
	自分	—	1	2	—	—
名前系 自称詞	+ちゃん	2	2	—	—	—
	名前	5	2	—	2	2
	あだ名	8	5	2	2	1
親族系 自称詞	+ちゃん	2	2	—	—	—
	姉ちゃん	—	—	1	—	—
	いない	3	2	3	5	5
	合計	25	25	25	25	25

小学生男子が両親に対する自称詞として最も多く使用している表現は「こっち」、次いで「こちら」という指示詞である。それに対し、女子が最も多く使用している表現は「あだ名」、次いで「名前」であった。女子の回答者に対する聞き取り調査によると、幼稚園時に自分に対して使用していた「あだ名」や「名前」を小学校入学以降も続けて使用しているとのことであった。

男子の間で自称詞として用いられている「こちら」「こっち」という指示詞の主な使用法は、以下の通りである。見てわかるように、従前から指摘のある「そちら」「そっち」と対になる用法（金井（2005）を参照）には取まりきらない拡張用法と見ることが可能である。

- ①母「今日は学校で○○さんと喧嘩したの？」
息子「ううん、こっち、何もしていないよ」
- ②父「お前、パソコン壊したの」
息子「こちら、全然パソコンに触ってないよ」
- ③父「何を食べる」
息子「こっちは天ぷら」

このように「こちら」、「こっち」という指示詞を使うと回答した児童に対し、これらの指示詞をいつから使用し始めたのかという聞き取り調査を行ったところ、5名は小学校2年生まで「名前」を使っていたが、2年生から「こちら」「こっち」に変えたと答えた。また別の5名は小学校進学時まで「あだ名」を使用していたが、小学校進学後に「こちら」に変えたという。他の2名は小学校3年生まで「名前」を使っていたが、3年生からは、周囲に「名前」を使う人があまりいなかったの「こっち」に変えたそうである。

中学生では、男子が両親に対して多く使用している自称詞は「自分」、次いで「おれ」、続けて「こっち」であった。中学生は小学生に比べ「こちら」「こっち」という自称詞として指示詞を用いることは少ないと考えられる。聞き取り調査によると、「自分」という表現を回答した生徒（6名）の中にクラブ活動に参加している者がいた。彼らは「自分」を使用する理由として、「クラブ活動では言葉遣いについてきびしく指導されるので家庭でもくせになった」と述べており、使用者は体育会系等のクラブ活動の影響を受けていると考えられる。日本の学校のクラブ活動では上下関係が非常に重視されるため、このような改まった表現が使用されている^[注2]。そこで、追加の聞き取り調査を行ったところ、部活動に参加している者は、先輩に対する自称詞として「自分」を用いていることが確認された。彼らは部活動の上下関係により、先輩から「自分」と自称するように厳しく指導を受け、「自分」を用いているということが明らかになった。この結果により、日本では、目上の人に対して失礼にならない表現を使用する傾向は、すでに中学校時代から確認されることがわかる。

また、中学生女子が両親に対して最も多く使用している自称詞は「うち」と「あだ名」で、同数であった。女子には、中学校進学後も「名前」を使用する

者が少なくない。女子中学生が「名前」を使用するのは、幼いころの両親、特に母親との親密な関係を維持しているためであると考えられる（セベフリパディ 2011）。なお、女子には「わたし」^[註3]という丁寧な表現の自称詞を使用する者が2名いるが、男子では確認されなかった。

高校生男子が両親に対して最も使用している自称詞は、「おれ」であった。次いで「おれ」より丁寧な「ぼく」^[註4]という自称詞を使う者が5名確認された。一方、高校生女子の間で両親に対して多く使われている自称詞は「うち」であった。次いで「あたし」^[註5]という自称詞が使用されていた。

大学生男子が両親に対して最も多く使用する自称詞は「おれ」と「ぼく」で、同数であった。高校生に比べ、丁寧な「ぼく」という自称詞を使用する者が多く、「おれ」という自称詞を使用する者は若干少ない。また、「わたし」という自称詞を用いる者は1名のみであった。一方、女子の間で両親に対して多く使われている自称詞は「あたし」、次いで「わたし」であった。

ここまでの調査結果をまとめると、女子は中学生から「わたし」という自称詞を使い始めるが、男子は大学生からである。この結果より、男子は小学校時代から「名前」や「あだ名」を自称として使用する習慣から離れて、女子より早く自称詞を使い始める。一方、女子は男子に比べ幼時期の言葉遣いを使用しなくなるのは遅いが、丁寧な表現を使い始めるのは早い。また、社会人の男性が両親に対して最も使用する自称詞は「ぼく」であった。次に多いのは「おれ」であるが、少数であった。一方、女性が最も多く使用しているのは「わたし」であった。男子も女子も社会に出た後に、明らかな言葉遣いの変化が確認される。このように、現代日本語には、両親に対して自分自身のことを表す表現が多様に存在する。話し手が親から自立しているのか、まだ依存しているのか、あるいは、もう大人としての自覚があるのか、まだ甘えているのか、使用している表現から話し手の親子関係が読み取れる。また、女子中学生、高校生が親に対して「うち」という自称詞を用いるのは、興味深い傾向である。小林（1999）は、「うち」は関西方言で、多く女性や子どもによって使われる代名詞とされるが、近年関東の女子中高生の自称詞として広がったと述べている。

4.2 祖父母に対する自称詞

表4 祖父母に対する自称詞（男）

人称	項目	レベル				
		小	中	高	大	社
人称系 自称詞	わたし	—	—	—	—	4
	ぼく	1	7	6	10	8
	おれ	4	4	8	5	3
	自分	—	2	5	1	1
	おいら	2	1	—	1	2
	わし	—	—	—	1	—
名前系 自称詞	名前	2	1	—	—	—
指示系 自称詞	こちら	6	2	—	—	—
	こっち	5	2	—	—	—
	いない	5	6	6	7	7
	合計	25	25	25	25	25

表5 祖父母に対する自称詞（女）

人称	項目	レベル				
		小	中	高	大	社
人称系 自称詞	わたし	—	2	5	10	14
	あたし	4	6	7	4	2
	うち	3	5	3	2	—
	自分	—	—	1	—	—
名前系 自称詞	名前	7	3	2	2	1
	あだ名	7	3	1	1	1
	いない	4	6	6	6	7
	合計	25	25	25	25	25

祖父母に対して用いられる自称詞は、男女共に両親に対する自称詞と同様である。小学生男子は「こちら」「こっち」という指示詞を自称詞として多用しており、女子は「名前」や「あだ名」を自称として多く用いている。また、中学生男子が祖父母に対して最も多く用いる自称は「ぼく」、次いで、「おれ」という自称詞であった。これは両親に対する自称詞の使用傾向とは逆である。「ぼく」という自称詞を使うと答えた回答者に対して行った聞き取り調査によると、3名は「アニメの影響で家族全員に対して「おれ」という自称詞を使う」、2名は「祖父母の話し方は非常に丁寧なので、祖父母に対しては「おれ」という表現を使えない」、2名は「年に何回しか会わないので、できるだけ丁寧な表現を使う」と回答した。「おれ」を使う回答者に聞き取り調査を行ったところ、2名が「祖父母と一緒に住んでいるので、父母に対して使う自称詞を祖父母に対しても使う」、ほかの2名は、「祖父母とは親しい関係なので、ほとんどの場合は自分のことを言うときに「おれ」を使うが、人前では「ぼく」という

自称詞を使う」と回答した。一方、女子の場合は、祖父母に対して最も使用する自称詞は「あたし」、次いで「うち」であり、父母に対する自称詞とは異なる結果であった。「うち」を使用する回答者に対する聞き取り調査によると、2名は「親しい関係で父母に対しても祖父母に対しても同じ言葉を使う」、1名は「中学生まで自分自身のことを「名前」を使っていたが、中学校に入ったら周りの影響で「うち」に変えた。家族全員に対して「うち」という表現を使う」、2名は「アニメの影響で中学校1年生から「あたし」という自称詞から「うち」という自称詞に変えた。ほとんど身内や友人たちに対して「うち」という自称詞を使う」と回答した。

高校生男子は、祖父母に対して、父母と同様に、自称詞「おれ」を最も多く使用していた。「ぼく」と「自分」という自称詞の使用も少なくなく、父母に対する場合に比べ多い。女子の間で最も多く使われる表現は「あたし」、次いで「わたし」であった。父母に対する自称詞の使用と比較すると、祖父母に対して「あたし」「わたし」のような丁寧な自称詞を使用する回答者が多い。

大学生男子の間で祖父母に対して多く使われる表現は、「ぼく」という自称詞であり、次に「おれ」であった。父母に対しては「おれ」と「ぼく」という自称詞の使用が同数であるが、祖父母に対する場合は、「おれ」は「ぼく」の半分であった。女子の場合、祖父母に対して最も多く使用する自称詞は「わたし」という自称詞であり、次いで「あたし」であった。父母に対する自称詞の使用と比較すると、「わたし」という自称詞の使用は2倍で、「あたし」という自称詞の使用は半分である。

社会人男性が最も多く使用する自称詞は、父母に対する自称詞と同様に「ぼく」であり、女性でも最も多く使用する自称詞は父母に対する自称詞と同様に「わたし」であった。これらの結果、父母よりも祖父母、特に別居の祖父母の場合に互いの距離が大きいため、中学生、高校生、大学生が祖父母に対して使用する自称詞は、父母に対する自称詞に比べ、より丁寧な表現が選ばれることがわかった。

4.3 兄姉に対する自称詞

表6 兄姉に対する自称詞（男）

人称	項目	レベル				
		小	中	高	大	社
	ぼく	—	—	—	1	1
	ぼくち	—	1	—	—	—
	おれ	5	7	8	7	5
	おいら	2	—	—	2	1
名前系 自称詞	名前	1	1	—	—	—
指示系 自称詞	こちら	1	—	—	—	—
	こっち	1	—	—	—	—
	いない	15	16	17	15	18
	合計	25	25	25	25	25

表7 兄姉に対する自称詞（女）

人称	項目	レベル				
		小	中	高	大	社
人称系 自称詞	わたし	—	—	—	—	6
	あたし	—	2	1	4	5
	うち	2	6	8	5	—
名前系 自称詞	名前	3	2	—	—	—
	あだ名	4	—	—	—	—
	いません	16	15	16	16	14
	合計	25	25	25	25	25

調査対象者に一人っ子・二人きょうだいが多かったため、データに片寄りが生じている可能性があるが、調査結果によると、男子の場合、年代を問わず、兄姉に対して多く用いる自称詞は「おれ」であった。一方、女子の場合、小学生は「あだ名」「名前」の順で、中学生、高校生では「うち」であった。大学生では「うち」と「あたし」の使用が同数である一方、社会人で最も多く使われていた自称詞は「わたし」「あたし」の順で、「うち」の使用者は確認されなかった。女子の場合は、小学生に確認された「あだ名」「名前」の使用が、中学生では減少し、高校生では見られないことが特徴の1つである。理由として、小学生女子は、両親と話す際と同様に幼いころからの習慣が残っていることが考えられる。しかし、高校生になると、大人としての意識が芽生え、「あだ名」「名前」は使用されなくなると思われる。一方、男子の場合は、小学生も「おれ」を多く使用している。これは兄・姉を庇護者とは考えず、自分と対等な存在とみなし始めるのが男性のほうが早いのではないかと考えられる。

兄姉に対して「おれ」という自称詞を使う33名の小学生から社会人の回答者に聞き取り調査を行ったところ、17名が「年齢差が1つか3つ程度なので、

「おれ」の方が使いやすい」、16名は「父母、祖父母に対しても「おれ」という自称詞を使うので、兄弟に対しても同様である」という回答であった。男子が、早い段階で、兄・姉を庇護者とは考えず、自分と対等な存在とみなし始める傾向を示している。それは、性差や時代による家族関係の変化が影響しているものと考えられる。

4.4 弟妹に対する自称詞

表8 弟妹に対する自称詞（男）

人称	項目	レベル				
		小	中	高	大	社
人称系 自称詞	おれ	4	6	6	6	7
	おいら	—	1	—	—	1
指示系 自称詞	こちら	2	—	—	—	—
親族系 自称詞	お兄ちゃん	1	—	—	—	—
	兄ちゃん	1	1	—	—	—
	にっちゃん	—	—	1	—	—
	いない	17	17	18	19	17
	合計	25	25	25	25	25

表9 弟妹に対する自称詞（女）

人称	項目	レベル				
		小	中	高	大	社
人称系 自称詞	あたい	—	1	—	—	—
	あたし	—	1	—	5	6
	うち	—	4	8	—	—
名前系 自称詞	名前	3	—	—	1	—
	あだ名	4	1	—	—	—
親族系 自称詞	お姉ちゃん	1	1	1	1	1
	姉ちゃん	1	—	—	1	—
	いない	16	17	16	17	18
	合計	25	25	25	25	25

表8・9に見られるように、妹・弟がいないという回答が多く、アンケート結果には少子化の影響が確認される。男子は、小学生から社会人まで弟妹に対して「おれ」という自称詞を使用する者が多かった。他に、小学生では「お兄ちゃん」「兄ちゃん」、中学生では「兄ちゃん」という親族呼称を使用する者がそれぞれ1名存在する。また、「ぼく」「自分」という自称詞は用いられていない。一方、女子の場合、小学生の間では最も多く使われる表現は、「あだ名」で、次に「名前」である。中学生と高校生では「うち」という自称詞が最も多く、使用される表現には年齢による変化があまり見られない。大学生と社会人は、「あたし」という自称詞を多く使用していた。また、小学生から社会人まで「お姉ちゃん」という親族呼称を使用すると答えた回答者が1名ずつ、小学生と大

学生に「姉ちゃん」という親族呼称が1名ずつ確認された。男子でも女子でも「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」などの親族呼称が用いられているのは、弟妹を保護する気持ちが強いからであると推測される。

5 考察

アンケートの分析を通して、自称詞の多様性とその背景を考察した結果、自称詞の使い分けに「性差」と「場面」という2つの要因が大きく影響している点が見出された。

5.1 「性差」による自称詞の使い分け

男子の使用する自称詞は、名前やあだ名といった幼児性の強い自称詞からは早い発達段階で離れる一方、中学・高校での「おれ」「自分」を経て、大学・社会人では「ぼく」になり、社会性の強い「わたし」にはなかなか収斂しない傾向が見られる。

また、小学5年生は家族の全員に対し、「こちら」「こっち」を多く使用するものの、中学生で減少し、高校生以上での使用が見られないことが今回の調査により判明した。

父母、祖父母に対しては年代により異なるが、「兄弟、弟妹」に対して用いる自称詞はほとんど変わらない。「おれ」という表現は「ぼく」と同様に主に男性が使い、相手が同輩以下である場合に使用すること（金丸1993:109-119）が影響していると考えられる。

女子の場合、小学生では家族全員に対し、「名前」「あだ名」を自称詞に最も多く使用していた。しかし、中学生・高校生の年代では、自称詞の使い方が変化し、「あたし」「うち」が優勢になる。また、社会性の強い「わたし」も、大学・社会人になるにつれて使用頻度が上昇する。

昨今、日本語の大きな特徴である「男性語」「女性語」が中性化する傾向を辿るとい説があるものの（小松1998:49）、未だこれらの使い分け、特に性別による人称代名詞の使い分けは健在であることが実証された。また、男女共に、話し手が使用する自称詞の種類は、話し手の性別や年齢とも関わりながら、話

し手に影響を与えることが確認された。

5.2 「場面」による自称詞の使い分け

アンケートの中で、「同じ兄姉、妹弟、父母、祖父母に対して、場面や状況により、数種類の表現を使う場合もある」という回答が多数得られた^[註6]。この回答の分析を通して、従来の研究の課題として、次の2点が指摘できよう。

第一に、同じ対話者間では、常に同じ形式の自称詞が使われていると想定されている点である。先行研究では、話し手が1人の相手に対し常に同じ自称表現を用いているということが前提となっている。

第二に、話し手が自称詞を使い分ける要因として話し手の属性、対話者との関係など、外的要素ばかりが強調されている点である。確かに外的影響も大きいであろうが、話し手自身の内面に關わる要因を軽視することはできない。

以上の点を踏まえ、筆者は、話し手が同じ人物に対して常に一定の自称詞を使用しているのではなく、場面に応じて複数の自称詞を使い分けている実態を探るため、追加調査を行った。以下に、筆者の調査結果を紹介する。

筆者は、小学5年男子1名、中学2年女子1名、大学2年女子1名に聞き取り調査を行った。いずれの調査でも、複数の自称詞が使い分けられていることが明らかになった。まず、ある小学5年男子の例を見てみる。

表10 小学5年男子

聞き手	自称詞
父母、祖父母	自分、ぼく、おれ、名前
兄	おれ、おいら、名前
妹	おれ、ぼくちん、名前

この小学生は、通常、表10の6種類の自称詞を、場面に応じて使い分けている、と述べた。例えば、父母あるいは祖父母と進路などの真面目な話題について話す際は、「自分」を、対話の場に他人が介在する場合は「ぼく」を使う。

一方、通常の場合では「おれ」、不機嫌なときは「名前」で自分自身のことを表す。同様に、兄、妹に対しても、機嫌が良いときと不機嫌なときに応じて自称詞を使い分けるといふ。例えば、兄、妹に対して通常は「おれ」、機嫌が

良いときは、兄に対して「おいら」、妹に対して「ぼくちん」、不機嫌なときは兄と妹に対して「名前」を用いる。

次に、ある中学2年女子に対する聞き取り調査の結果を示す。

表11 中学校2年生女子

聞き手	自称詞
父母、祖父母	うち、名前、あだ名+ちゃん
兄	うち、名前、おれ
弟	うち、姉さん、名前

この中学生は、通常、場面によって4種類の自称詞を使い分けていると述べた。例えば、父母や祖父母と話すときは「うち」を、会話が弾んだときには「あだ名+ちゃん」を、意思決定の際など、真面目な会話の際は「名前」を使うと述べた。兄に対しても通常は「うち」を、真面目に話すときは「名前」を、けんかしている場合は、たまに「おれ」を使う。弟に対しては、通常は「姉さん」を、遊ぶときは「うち」を、時々「名前」を使うということであった。

そして、ある大学2年女子の調査結果は、表12のとおりである。

表12 大学2年女子

聞き手	自称詞
父母	わたし、うち、あたし
祖父母	わたし、あたし
姉	うち、名前、あたし、わたし、あだ名

この大学生は、通常、5種類の自称詞を場面によって使い分けていると述べた。通常父母に対して「あたし」を、会話の場に他人が介在する場合は「わたし」を、また親子間でも会話が弾んだときには「うち」を使う。また、祖父と話すときは「わたし」を、祖母との関係は祖父に比べてより緊密なので「あたし」を使う。さらに姉と話す際は、通常は「あたし」を、会話が弾んだときは、「名前」か「あだ名」、たまに「うち」、会話の場に他人が介在する場合は「わたし」を使うということであった。

以上、「場面」に応じて使い分けられる自称詞の実態を示した。その結果、

まず、話し手が同じ人物に対し、常に一定の自称詞を使用しているのではなく、いくつかの自称詞を使い分けていることが明らかになった。

また、従来の研究で重視されてきたように、話し手が自称詞を使い分ける要因として、話し手の属性、対話者との関係など、主に外的要素の影響は大きいであろうが、話し手自身に関わる要因を軽視することはできない。例えば、上記の小学5年生、中学2年生と大学2年生のそれぞれの回答に基づき、その言語行動を検討すると、自称詞のスタイルの要因として、話題、傍聴者、話し手のムードの3点を挙げることができよう。中学2年生の「名前」「あだ名+ちゃん」と大学2年生の「わたし」「あたし」という自称詞のように、話題の性質や話題にのぼる人物の影響により自称詞にゆれが生じることがある。

6 結語

本研究で提示した調査結果と分析により、現実の自称詞は、先行研究で前提とされていた上述の2点の枠組みから外れる傾向が確認された。

日本の呼称表現は多様で、相手との関係と、自我の認識に応じて適切だと思われる呼称が選択される。例えば、家庭内で、自分の名前を使用する場合は、両親との関係が親密であり、「わたし」「じぶん」「おれ」等の使用は、成人の意識の芽生えであると考えられる。鈴木(1973)では、親族間で通常用いられる基本的な自称詞の形式は、話し手と聞き手の年代差、世代差に基づいて定まっており、聞き手に応じて自称詞が使い分けられると捉えられていた。この場合、親にとっては、子どもの言葉遣いから成長の度合いが分かるという利点がある。日本では、性差や発達段階に応じて使用されることばが変わる。しかし、本調査の結果、自称詞の選択はこれら以外に、状況や場面に応じて、つまり様々な要因により自称詞の形式に「ゆれ」が生じたり、数種類の形式が使い分けられる姿が明らかになった。

〈一橋大学大学院生〉

注

- [注1] ……「あだ名」とは「名前の最初の2拍+ちゃん/くん」などである。また「いない」とは当該の親族がいないという回答があったものである。
- [注2] …… 金丸(1993:77)を参照。
- [注3] …… 「わたし」は、現在、日本語の一人称としては、男女問わず最も広く用いられている自称詞である。ただし男女によって使用年齢層や語感に微妙な相違が見られる。まず、男性の場合は、成人が、目上の人や対等または目下のあまり親しくない人に対して、やや改まった場面で使用する。これに対して女性の場合は年齢に関わりなく、また目下・目上の区別もなく広く一般の人に対して、親しみを込めて用いる(金丸1993:79)。
- [注4] …… 「ぼく」は、主に若い男性が、男女を問わず対等または目下の者に対して使用する表現である(国語審議会1952)。
- [注5] …… 「あたし」は、『日本国語大辞典』第二版(小学館)によると、「あたし」は「わたし」の変化した語。主として女性が用い、やや砕けた語感を有する。
- [注6] …… アンケートの自由意見欄で、小学生男子21名/女子22名、中学生男子20名/女子19名、高校生男子19名/女子22名、大学生男子18名/女子17名、社会人男性16名/女性17名が、「家族全員に対して(父母、祖父母、兄姉、弟妹)、普通はアンケートで答えた表現を自称として用いるが、常に同じ表現を使うわけではない。場面や状況によって表現を変えることもある。例えば、同じ兄姉、妹弟、父母、祖父母に対して、場面や状況により、数種類の表現を使う場合もある」と回答した。

参考文献

- 池上秋彦(1984)「体言の敬語法」鈴木一彦・林巨樹(編)『研究資料日本文法9 敬語法編』pp.48-77. 明治書院
- 金井勇人(2005)「く話し手」を指す「こちら」の2用法』『国語学 研究と資料』28, pp.37-47. 早稲田大学国語学研究所と資料の会
- 金丸英美(1993)「人称代名詞・呼称」『日本語学』5(12), pp.109-119. 明治書院
- 国語審議会(1952)「これからの敬語」
- 衣畑智秀・楊昌洙(2007)「役割語としての「軍隊語」の成立」金水敏(編)『役割語研究の地平』pp.179-181. くろしお出版
- 国立国語研究所(2002)『国立国語研究所報告118 学校の中の敬語1 アンケート調査編』三省堂
- 国立国語研究所(2003)『国立国語研究所報告120 学校の中の敬語2 アンケート調査編』三省堂
- 小林恵美子(1999)「自称、対称は中性化するか?」現代日本語研究会(編)『女性の言葉・職場編』pp.113-137. ひつじ書房
- 小松寿雄(1998)「キミとボク—江戸東京語における対使用を中心に」『東京大学国語研究

- 室創設百周年記念国語研究論集』pp.668. 汲古書院
- 桜井隆 (2002) 「「おれ」と「ぼく」」現代日本語研究会 (編) 『男性のことば・職場編』 pp.121-148. ひつじ書房
- 真田信治 (1990) 『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院
- 杉戸清樹・尾崎喜光 (1997) 「待遇表現のひろがりとその意識—中高生の自称表現を中心に」『月刊言語』26(6), pp.32-39. 大修館書店
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書
- 鈴木孝夫 (1983) 「日本語の自称詞と対称詞」『現代のエスプリー—日本人の間柄』178, pp.121-126. 至文堂
- セペフリバディ, アザム (2011) 「現代日本語における家族から呼ばれるときの呼称」『一橋大学国際教育センター紀要』2, pp.57-71.
- セペフリバディ, アザム (2012) 「現代日本語における家族に呼びかける際の呼称表現—世代差と性差を中心に」『一橋日本語教育研究』1, pp.61-72. ココ出版
- 本田明子 (1998) 「職場・会社の中の呼称—自然談話データにみる事例」『日本語学』17(9), pp.77-82. 明治書院
- 吉田裕久 (1990) 「学校における先生・子供の呼称」『日本語学』9(9), pp.25-31. 明治書院